

# 時 の 流 れ

京都大学名誉教授 六 車 照

防災研究所は本年4月1日をもって創設45周年を迎えられました。心からお祝い申し上げます。創設は昭和26年(1951年)ですが、当時の私は本学工学部建築学科の2回生でありました。中心となって創設に奔走されたお一人である故棚橋 諒先生が、ある日の講義の中で設立の苦労話を交えながら防災の重要性、基礎から応用に至る総合的立場からの組織的研究の必要性を説かれ、研究所創設を初めて知ったのであります。「計り知れない自然の力は人間業では永久に征服困難かも知れないが、いつかはそれを征服することを夢見ながら、人の英知を結集してそれに立ち向かってこそ、学問・技術の限りない発展が期待できるのである」と結ばれた言葉に、十分理解できないまま感銘を受けたことを今でも覚えています。

設立当初の研究所は、災害の理工学的基礎研究、水害防止の総合的研究、震害風害などの防御軽減の総合的研究の3部門で発足いたしました。当時は、防災は科学にはなり難く、大学でやるべき学問ではないとまで言われていたようです。したがって、学内のみならず外部からも研究所の活動に批判的な目が注がれていたと聞いております。しかし、時の経過とともにわが国の各地で地震、風水害などによる甚大な被害が発生し、自然災害列島という言葉がいつしか使われるようになって、防災の重要性が一般にも認識されるに至りました。

研究所もこのような時の流れの中で、防災研究の必要性を世に説き、発展を続けてきたと思います。そして、私が研究所にお世話になった平成4年の頃は、20余の研究部門を有する防災研究の中心的組織に発展していましたが、大学改編の大波にもまれ、来るべき改編に研究所が如何に対処、変革していくかの見通しも定かでない時代でした。私はこれといった貢献をすることもなく平成6年に退官いたしました。研究所の全スタッフの並々ならぬ御努力により、共同利用を軸とする抜本的改編を見事に実現されております。時の流れとは言え、組織の抜本的改編は勇気と決断を必要とする大事業だと思います。改編された組織が今後如何に機能し、防災研究の中心としての役割を如何に果たしていくかは、現役の皆様方の双肩にかかっております。しかし、誰も取ることの出来ない先人が築いた学問の伝統が研究所にはあります。その伝統を糧に新組織による新しい伝統を築いていただきたいと思います。皆様方の研究の成果が新しい時の流れを作る原動力となり、防災研究所がますます発展されることを心から期待して止みません。